

アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(6) —1933年から1935年のサルコリ関連の資料を中心に—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities (6)
—Focusing on Documents Relating to Sarcoli, from 1933 to 1935—

直 江 学 美 (人間科学部こども学科准教授)
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Associate Professor)

〈要旨〉

本研究では、1933(昭和8)年から1935(昭和10)年の間に日本で書かれた、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)に関連する資料を調査・収集し、報告する。サルコリは1936(昭和11)年に没していることから、本研究が対象とする2年間もサルコリの晩年といえる。

収集した晩年のサルコリ関連の資料から、1933年から1935年に日本で行われた、サルコリが関係する音楽活動についての報告と検証を行う。検証をもとに、最終的にはサルコリの音楽活動をまとめ、サルコリが日本の音楽界に与えた影響を考察する。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ, 西洋音楽受容史, イタリアオペラ

はじめに

筆者はこれまで、1911(明治44)年に来日したアドルフォ・サルコリの音楽活動を、資料をもとに年代順に調査してきた。サルコリが来日した1911年から翌1912(大正元)年に書かれた資料からは、サルコリが「声楽家」として日本の新聞や雑誌に多く取り上げられていたことを明らかにした。サルコリは当時の日本音楽界に必要とされ、日本の声楽界における新しい、そして貴重な存在として受け入れられていた⁽¹⁾(直江 2016.9; 23-30)。

日本音楽界に「声楽家」として受け入れられたサルコリは、徐々に「指導者」としての活動も行うようになる。1912年に声楽教授希望者を募ったサルコリの下に、多くの弟子が集まった。サルコリの指導は声楽だけにとどまらず、マンドリンにも及ぶ。サルコリが慶應義塾の学生にマンドリンを教えたことをきっかけとして、日本の学生の間にもマンドリンが流行したという。一方サルコリの「声楽家」としての活動範囲も東京から地方へと広がっていった。1913年から1915年にかけては、大阪、京都、名古屋でも演奏会を行った記事、及びサルコリの人気定着したことが伺える記述が複数存在したことから、サルコリの存在が日本に定着した時期と位置付けた⁽²⁾(直江 2017.3; 31-40)。

1916(大正5)年から1920(大正9)年までの資料調査からは、サルコリは音楽関係者のみならず、一般人にも広

く認識されるようになったことを指摘した。また、「サルコリー式なる独唱」との記述により、サルコリの歌唱法がそれまでの日本になかった新しい歌い方として認識され、日本の音楽界に影響を与えていたことを明らかにした⁽³⁾(直江 2018.3; 53-58)。

1921(大正10)年から1930(昭和5)年までの資料にはサルコリ本人よりも弟子が活躍する様子が多くみられた。また、プッチーニやヴェルディなどイタリアの歌を多く歌うサルコリ門下が「イタリア系」と称されるようになったことを指摘した。この時期、サルコリ及び弟子たちは、ドイツ音楽が中心であった、東京音楽学校の「ドイツ系」に対する一つの勢力として見られるようになっていた⁽⁴⁾(直江 2018.9; 25-32)。

1931(昭和6)年から1932(昭和7)年に書かれた資料にはサルコリの活動がほとんどみられない。一方、弟子の活動が新聞や雑誌により多く取り上げられていることがわかった。この時期の日本音楽界は、上野にある東京音楽学校を「上野」と呼び、それ以外を「民間派」とするなど、東京音楽学校とそれ以外という区別がはっきりと意識されていた。このくくりによるとサルコリは「上野」に対する「民間派」である⁽⁵⁾(直江 2019.3; 69-74)。自宅を教授の場としたサルコリおよびイタリアオペラを学んでいたサルコリの弟子たちは、日本における西洋音楽受容の中心的役割を担ってきた東京音楽学とは相対する存在であった。

本研究では、続く1933（昭和8）年から1935（昭和10）年に書かれたサルコリ関連の資料を調査・収集し、報告する。サルコリが翌1936年3月に死去していることに鑑みると、本研究が対象としている1933年から1935年はサルコリにとって晩年にあたる。サルコリが66歳から68歳の歳である。

表記は出来る限り原文記載のままとする。■は読解不能の文字とし、（ ）は筆者の補筆とする。

1 1933（昭和8）年のサルコリ関連記事より

1-1 「シエナ会」主催の「大演奏会」

「シエナ会大演奏会 四月二十八日（金）午後七時 日本青年館 サルコリー氏門下生よりなるシエナ会では小原威子、その他八名出演してオペリ（ママ）物の演奏会を開く、ピアノ伴奏はエンリコ・ロウシイ 会員券 一圓、二圓」⁽⁶⁾（『月刊楽譜』1933.4：116）

1933（昭和8）年4月発刊の『月刊楽譜』に、サルコリの弟子たちが開く「シエナ会大演奏会」の予告記事が掲載されている。会の由来や演奏会を開くことになった経緯も4月27日付『東京朝日新聞』5面に「孤獨に氣も弱るわが樂壇の父アドルフ・サルコリー氏 若いお弟子が心を察して謝恩の爲のシエナ会」⁽⁷⁾のタイトルで掲載されているので次に紹介する（写真1）。



（写真1）「孤獨に氣も弱るわが樂壇の父」⁽⁷⁾

『お蝶夫人』の三浦環女史を始め現在イタリアにゐる原信子、喜波貞子、バルトラメリ能子、關屋敏子さんなど世界的歌手を育てあげたアドルフ・サルコリー氏が日本にきてから丁度二十二年になる、來朝當時男盛りだつた氏の頭髮も今は眞白になつてスツカリ老ひ込み、近頃は健康も優れずメツキリ氣が弱つて非常に涙もろくなつた、それも無理ではない、氏には妻子もない上に、昔の教え子達は皆外國に行つてしまつたのだから……そこで帝國音樂學校教

授のソプラノ歌手小原威子女史を始め渡邊花子、青木晴子、長島せつ子（ママ）さんなど現在のお弟子達は、そのさびしい先生を慰めるためこの際謝恩音樂會を開きたいと申出たところ、謙讓な氏はあくまで固辭してこれを受けず『門下生の溫習會ならやつてもよい』といふ許しがやつと出たので、お弟子達は勇み立ち、その會の名もサルコリー氏の生地シエーナの名を取つて『シエナ會』と名づけ、來る二十八日その第一回を日本青年館に開く事となつた、サルコリー氏が來朝したのは明治四十四年、當時我國ではドイツ音樂だけしか行はれてゐなかつたが、氏は始めてイタリー歌劇の眞髓を傳へ、その門下より前述の有名な歌手を數多く出し、又マンドリンを始めて我國に紹介して以來二十二年間専ら歌手の養成につとめ、パツツオールド夫人を我が樂壇の母とすれば、氏は將に我樂壇の父と敬つて然るべきである、四谷仲町のお宅に氏を尋ねるとどうも近頃體の具合が悪くて困ります、もう一、二年したら兄妹たちが待つてゐるイタリーへ歸りたいと思つてゐますと口を切つたがいかにさびしさうだ、そして思い出ふがに語る追憶—私をかくも長く日本に留めたのは、全くお國が好きだからです私は歌を教へてゐる時が一番楽しく、何も彼も忘れてしまひます三浦環さんを初めて教へた時は、たしか環さんが廿四歳だつたでせう、當時は今のやうにコーヒー等がすぐに手に入らなかつたので、毎日水ばかり飲んでゐたのですが、環さんと一緒にわざわざ上野の精養軒までコーヒーを飲みに行つたものです環さんは非常に熱心に勉強しました、それに比べると近頃の人はどうも熱心さが足りなくて、二、三年習ふとすぐにやめて終ひますが、歌は少なくとも五六年はミツチリやらなければ駄目です、器用な人は早く上達はしますが、その代りに長續きがしません、……昔教へた人達が常に私を忘れないで、絶えず便りをして下さる事は本当に嬉しい事です」⁽⁷⁾（『東京朝日新聞』1933.4.27）

これらの記事を以下にまとめる。

- ①サルコリの弟子たちは健康が優れないサルコリを慰めようと演奏会を企画した。そして、サルコリへの感謝の意を表すために謝恩會を開きたいとサルコリに提案した。サルコリの「溫習會ならやつてよい」という返事により、溫習會「シエナ会大演奏会」を開くことを決めた。会の名前「シエナ会」は、サルコリの出生地であるシエナから取って名付けた。
- ②演奏会は4月28日午後7時開演、日本青年館で行われ、入場料は1円と2円である。
- ③サルコリが来日してから22年が経つ。サルコリは来日当時ドイツ音樂しか行われていなかった日本に、初めてイタリア歌劇を伝え、22年の間に門下より有名な歌手を數多く輩出するにとどまらず、マンドリンも初めて日本に

紹介しており「我楽壇の父」と敬って然るべき人物である。



(写真2)「シエナ会大演奏会 プログラム」⁽⁸⁾ (表紙)

プログラムによると、出演者は、船越富美子（ソプラノ・リリコ）、服部貞子（ソプラノ・レジエロ）、長島とく子（ソプラノ・リリコ）、阿南しのぶ（ソプラノ・リリコ）、山田兼雄（バス）、石井靖子（ソプラノ・レジエロ）、橋本花子（ソプラノ・リリコ）、青木晴子（ソプラノ・リリコ）、小原威子（ソプラノ・レジエロ）の9名、ピアノ伴奏はエンリコ・ロッシーである。演奏会は2部で構成され、出演者がそれぞれ1-3曲を歌った。

この「シエナ会大演奏会」に関しては『月刊楽譜』5月号および6月号にも記事が掲載されている。5月号には「楽壇日誌」の欄に神戸道夫が次のように書いている。

「二十四日サルコリ氏の門下生達で新たに組織したシエナ會の披露が三時からレインボウグリルで催された。シエナといふのは恩師サルコリ氏の生まれ故郷イタリアの一僻村の地名なそうだ。二十八日にはまづシエナ會の初演奏会を催し、秋には大々的に謝恩音樂會を開くとのことだつた。サルコリ氏は三浦環、原信子、喜波貞子、關屋敏子等を門下から出した乾燥からシエナ會を作つたお弟子の親切を感謝するやらで話しながらボロ、と涙を流す感激ぶりだつた牛山さんが通譯されたが牛山さんの、イタリア語の達者な方には一同驚嘆する。野村さんは中學生の日、京都でサルコリ氏の独唱を聴き全くチャームされ、その時音樂の美しさに心情をうたれたのが今日批評家となつた原因の一つであると感想を述べられた實感のこもった名説には僕達も深い感銘を受けた」^[9]（神戸道夫 19335：94）

神戸道夫の記事中に出てくる「野村さん」は、音楽評論家の野村光一（1895-1988）の事と思われる。1895年生ま

れの野村光一であればサルコリは1913（大正2）年6月12日に京都青年会館で演奏を行っており、1913年は野村が18歳の年にあたる。



(写真3) レインボーグリルでのお茶会⁽¹⁰⁾ (提供：丸山洋子氏)

『月刊楽譜』6月号の1頁目にはシエナ会の披露が行われたレインボーグリルでの写真が掲載され、102頁には「シエナ會演奏会（二十八日夜日本青年館）伊太利シエナの生まれであるサルコリー氏の門下生が出演した。出演者は小原威子以下八名であった」との記事が載せられた⁽¹⁾（『月刊楽譜』1933.6；102）。

写真(写真3)は、「レインボウグリルでのお茶会」の折に撮影された集合写真で、弟子が所有していた。メガネをかけた、白髪で老いた様子のサルコリを中心に関係者が並ぶ。

1-2 「シエナ会」主催の「謝恩大演奏会」

1933年は、サルコリ門下生「シエナ会」の活動がより活発に行われた年となった。サルコリの弟子たちは4月28日に開いた「シエナ会大演奏会」に続いて、12月5日には「謝恩大演奏会」を開催する。「シエナ会大演奏会」の開催にあたっては当初「謝恩音楽會を開きたいと申出たところ、謙譲な氏はあくまで固辞してこれを受けず『門下生の温習會ならやつてもよい』といふ」サルコリの意向により、謝恩音楽会ではなく、温習会に変更して開催した経緯があった⁽⁷⁾。しかし、12月5日に企画された演奏会は「謝恩大演奏会」と題され、弟子たちが当初思い描いていたサルコリへの感謝の気持ちを表す「謝恩」の意味合いが込められた演奏会となった。

プログラムに相当するリーフレットも「サルコリ先生略歴 謝恩大演奏會」の題目がつけられ、サルコリのこれまでの経歴などが写真と共に紹介されている（写真4）。



(写真4)「サルコリ先生略歴謝恩大演奏会」⁽¹²⁾ (表紙)

このリーフレットは14頁にもおよぶカラー印刷のもので、前半がサルコリの経歴に関する内容、後半が出演者の顔写真と「歌詞並びに解説」が掲載された力の入ったものである。

冒頭の「御挨拶」にも「アドルフォ・サルコリ先生は輝かしい青春時代を伊太利當代の巨匠として南歐に謳はれましたが黎明期に在ったわが樂壇の懇請によつて來朝され既にこの異境に二十餘年を過されて居ます。功績に就いては今更申し上げる迄もなく本邦聲樂の父としてその熱心な指導薫陶のもとに幾多の樂人が輩出し樂壇今日の繁榮を築かれましたが殊に歌劇勃興時代の御努力は不朽の光芒を樂壇史上に放つものと思ひます。最近先生健康勝れられず年來藥餌に親しまれ晩年漸く寂寥の思ひが致しますので私達一同先生の故郷伊太利『シエナ』の名のもとに集ひこゝに謝恩の一端を表はす演奏會を催し老師の病床を慰さめんとしました處幸ひにご賛同くださいまして多數ご來場を見ました事は一同の深く感謝する處で御座います。昭和八年十二月五日シエナ會」と書かれ、サルコリへの謝恩の意味を込めた演奏会であることが示されている。

出演者は、廣瀬勝代(ソプラノレヂエロ)、井上起久(メッソソプラノ)、大津賀八郎(テノール)、竹内平吉(寶塚交響樂團指揮者)、寺澤民子(ソプラノリリコ)、川口勝二(フルイート)、ボナビタ(テノール)、チエカレリー(ピアノ)である。

この演奏会に関しては、1934(昭和9)年1月号の『月刊楽譜』に堀江謙吉の署名で次の感想が掲載されている。タイトルは「二つの演奏会」である。

「十二日(ママ)五日關西在住のサルコリ門下生からなるシエナ會の主催で謝恩演奏會が開かれた。(…)會館としては稀に見る盛況ぶりで、經濟的には多少の缺損を出した

様であるとは云え、この演奏會の目的は完全に達せられた譯である」

タイトルの横には「於大阪朝日會館」と書かれており、記事中でも「關西在住のサルコリ門下生からなるシエナ會の主催」とある⁽¹³⁾(堀江謙吉 1934.1:119-120)。リーフレットには開催場所の記述は無いが、12月5日に開催された「謝恩大演奏会」は、關西在住のサルコリ門下によって、大阪の大阪朝日會館で開かれたようである。翌年1934(昭和9)年4月にシエナ會が行った演奏會が「第二回」となっていることから、この關西在住者によって開かれた「謝恩演奏会」は、シエナ會主催の正式な演奏会にはカウントされず、あくまでも弟子の一部によって開かれた演奏会という意味合いが強かったとも推測される。ともあれ、14ページにも及ぶカラーで印刷されたリーフレットや内容から、サルコリに対する弟子たちの強い思いが感じられる。また、サルコリの弟子は、東京圏のみならず、關西にも存在し、演奏會を開くことができる力があつたことがわかる。

2 1934(昭和9)年のサルコリ関連記事より

2-1 原信子の帰国

1934年1月2日にサルコリの弟子である原信子がイタリアから帰国する。1月19日付『読売新聞』には原信子が行った演奏についての批評が掲載された。伊庭孝によって書かれたその記事は「十三年ぶりで聴いた原信子の聲」のタイトルで「以前とは丸つきりちがつた聲の柔らかさと甘さ。それに何ともいへない輝きがある。理知的に処理されたフレージング、そして世間に俗にいふイタリア式の誇張した厭味な間はづれの箇所がなく、本格的なもので、近頃よく範唱といふ事をいふが、日本にゐてアリアを習つてゐる人でイタリア式に就くべきか離るべきかを迷つてゐる人にはよい模範であると思ふ」と高い評価が綴られている⁽¹⁴⁾(伊庭孝 1934.1.19)。中でも「イタリア式に就くべきか離るべきか」との言葉が当時の様子を表しており興味深い。原信子の歌は、1月16日午後6時に東京會館で行われたお茶會の席で歌われたようである⁽¹⁵⁾(『月刊楽譜』1934.3:118)。

2-2 「第二回シエナ會聲樂大演奏會」開催

サルコリ門下は、4月20日に「第二回シエナ會聲樂大演奏會」を開催した。『月刊楽譜』4月号にはシエナ會會員のうち4月20日の演奏會に出演するメンバーの集合写真が「シエナ會の人々」のタイトルで掲載される⁽¹⁶⁾(『月刊楽譜』1934.4:1)。同号102頁には、次のような告知がされた⁽¹⁷⁾(同上:102)。

『第二回シエナ會聲樂大演奏會』

主催 サルコリー先生門下シエナ會

日時 四月二十日(金)後七時

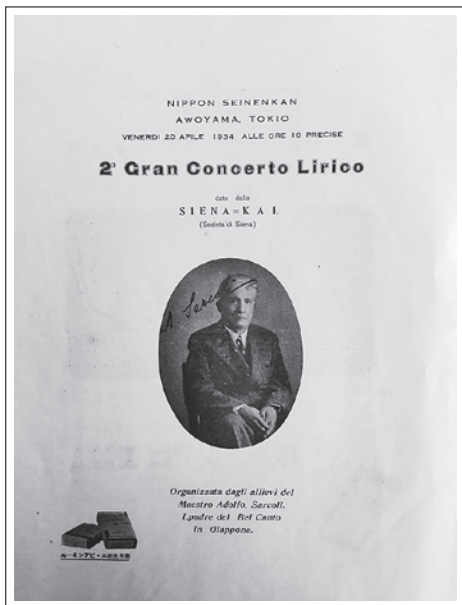
会場 日本青年館

出演者 船越富美子, 鈴木末子, ワイディング鈴木, 大津賀八郎, 寺脇さわ子, 山田兼雄, 長島とく, 石井靖子, 宮崎好子, 竹田友紀子, 小原威子, 阿南しのぶ, 本多花子, 井上ケイ子, 小林千代子, 三上孝子。

曲目 伊, 佛の歌劇中より二十五曲。

會員券 一, 二圓

「第二回シエナ會聲樂大演奏會」のプログラムの表紙にはサルコリの写真と, サルコリに関して「Lpadre del Bel Canto in Giappone.」(日本におけるベル・カントの父)との紹介が載せられている(写真5)。

(写真5)「第二回シエナ會聲樂大演奏會 プログラム」¹⁸⁾(表紙)

「第二回シエナ會聲樂大演奏會」の数日前, 4月14日にはシエナ會のお茶会が銀座ヤマト別館で催され, サルコリも出席している。その時の様子は『月刊楽譜』5月号に掲載された¹⁹⁾(『月刊楽譜』1934.5; 巻頭)。

3 1935(昭和10)年のサルコリ関連記事より

3-1 「第三回シエナ會声樂大演奏會」と老いるサルコリ

シエナ會は1935年3月にも演奏会を企画した。1933年に初めて行われたシエナ會の演奏会は, その後毎年開催され, 1935年開催のこの會が3回目, 大阪での開催も含めると4回目の演奏会となる。1935年3月の會は, 3月20日と3月22日の2回行われた。場所はいずれも日本青年館であったが, 演奏曲目や出演者は一部異なっている。入場券には“GRAN CONCERTO OPERATICO”と書かれている(写真6)。

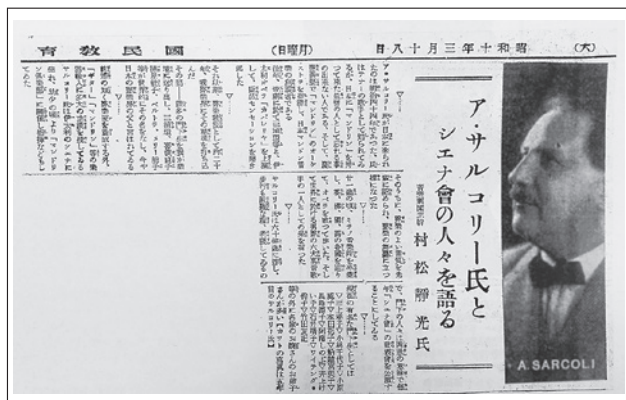
(写真6)「第三回シエナ會演奏會」²⁰⁾(入場券)(提供:丸山洋子氏)

「第三回シエナ會演奏會」の告知記事が3月2日付『東京朝日新聞』に掲載された。「日本青年館では, サルコリー門下のシエナ會が二十日夜に, ペッツォールド夫人門下の撫子會が二十三日夜に催されるがシエナ會には船越富美子, 小原威子, 三上孝子, 石井靖子, 阿南忍, 小林千代子, 長島徳子嬢等十数名の女性の外, 特に關屋敏子嬢も出演し, 撫子會には武岡鶴代, 伊藤敦子, 黒川いさ子, ダン道子さん等が恩師の爲に出演する。我が楽壇を育てた二老人のためかく相次いで謝恩の演奏會が催される事は嬉しい事である²¹⁾(『東京朝日新聞』1935.3.2)。

同じ月, 3月18日付『国民教育新聞』に「ア・サルコリー氏とシエナ會の人々を語る」と題した記事が掲載された。執筆したのは, 音楽新聞主幹の肩書がついた村松静光という人物である。

「ア・サルコリー氏が日本に來られたのは明治四十四年であつた, 氏はテナーの歌手として知られてゐるが, 日本に『マンドリン』を持って來た最初の人として忘れる事の出来ない人である, そして, 慶應義塾で『マンドリン』のオーケストラを指導し, 日本マンドリン音樂の創設者である往年, 帝劇に於て三浦環等と, 伊太利オペラ「カバレリヤ」を上演して, 断然センセーションを捲き起した▽それ以來, 我聲樂界にその精魂を打ち込んだその間一幾多の門下生を我が楽壇に送り出し, 三浦環, 喜波貞子, 關屋敏子, ベルトラ, メリー能子(ママ)等が世界的にその名をなし, 今や日本の聲樂會の父と言はれてゐる▽前述の如く聲樂家を養成する外, 『ギター』『マンドリン』等の樂器輸入に多大の功績を残してゐるサルコリー氏は伊太利亜のシエナに生まれ, 幼少の頃より『マンドリン俱樂部』に關係し指揮などもしてゐたそのうちに, 聲樂のよい素質を先輩に認められ, 聲樂の舞臺に立つ様になつた▽廿一歳の頃, ミラノ音樂院を卒業し, 英, 佛, 獨, 露の各國を巡りて, オペラを歌つて歩いた, そして世界に於ける男聲の六大高音歌手の一人としての榮を荷つた▽サルコリ氏は六十餘歳達し, 歩行も困難な程, 老衰してゐるので, 門下の人々は

謝恩の意味で毎年「シエナ會」の発表會を公演することにしてゐる▽現在の有名な門下生としては▽三上孝子▽小林千代子▽小原威子▽本田花子▽船越富美子▽長島徳子▽阿南しのぶ▽井上けい子▽石井靖子▽ワイテング・鈴子▽竹田友記等の外に名家のお嬢さんが多い【カットの寫眞は五年前のサルコリー氏】²²⁾ (松村静光 1935.3.15)



(写真7) 1935年3月15日付『国民教育新聞』「ア・サルコリー氏とシエナ會の人々を語る」²²⁾

村松静光によって書かれたこの記事は、サルコリの略歴、そして来日してからのサルコリの活動からシエナ會の演奏會や弟子についても紹介してある。5年前（サルコリは63歳）のものとするサルコリの寫眞が紹介され、文中には、「(今では) 歩行も困難なほど老衰してゐる」とサルコリの様子が書かれている（写真7）。

この記事が書かれた1935年に撮影されたと思われるサルコリの姿が寫眞に残されている²³⁾（写真8）。痩せた姿のサルコリが四谷仲町の自宅前に立っている寫眞で、裏に「8/1935 a.sarcoli」と書かれている。

1930年頃に撮られたとされる寫眞（写真7）と、1935年の寫眞（写真8）のサルコリを比較すると、新聞や演奏會



(写真8) 自宅前で手をあげる晩年のサルコリ²³⁾ (1935年8月撮影。提供：丸山洋子氏)

パンフレットや音楽雑誌で語られていた「サルコリの健康状態が良くないため、サルコリを慰めようと演奏會を企画した」弟子たちの気持ちが十分わかる。また、1935年のサルコリの姿（写真3）と1933年の姿（写真8）を比べても、1935年の寫眞はより痩せて見える。サルコリは1930年頃に境に年々衰えていったようである。

寫眞の所有者で弟子の丸山徳子の自宅には「3月18日(月)」と手書きで書かれた「第三回シエナ會演奏會」に関する新聞が残されている。タイトルは「麗人ぞろひのシエナ會演奏會」で、切り取られて保管されていたため掲載紙名は分からないが、発行号数が第170号であることから一般紙ではなく業界紙とも考えられる。リード文には「第三回シエナ會の演奏會は、来る廿日水曜日午後七時から明治神宮外苑日本青年館で行はれる、當夜はサルコリー氏に教えをうけた關屋敏子さんが老先生を慰めるため特別出演として『歌劇ハムレット』『聴け雲雀の聲を』『お夏狂乱』『お蝶夫人』等を独唱する」と書かれている²⁴⁾（新聞紙名不明 1935.3.18）。老いるサルコリのために關屋敏子が特別に演奏したようである。

実際に開催された「シエナ會演奏會」の寫眞が『月刊楽譜』4月号に、感想が5月号に掲載されている。寫眞にはサルコリも出演者と一緒に舞台上に立ち並んでいる様子が写っている²⁵⁾（『月刊楽譜』1935.4；巻頭）。5月号に掲載された演奏會の感想は伊庭孝のコメントとして「伊庭孝氏曰く一遅れて入場して第一部は聴かず。三上孝子が大層よかつたと言ふ噂であつた。第二部の井上ケイ子は非常に柔いレジエロらしい嬋い聲、それから第三の石井康子は聲もよく將來有望なる歌手である。小林千代子の『ラクメ』は終りの音でつまづいたが、レビューで毎夜歌つてゐる此の人としては上出来。小原威子の『ソナンブラ』は教師らしい落着を見せて立派に歌つてゐたが、聲そのものは生彩に乏しかつた。第三部廣瀬勝代夫人は素人の奥さんであるが素人の歌としてはなかなかたいしたものである。最後は關屋敏子の「お夏狂乱」其他。『聴け雲雀の聲』は無難に歌はれ、聲は全体に先般歌舞伎座に於ける獨唱會よりは美しく聞かれた²⁶⁾と評されている（伊庭孝 1935.4；159）。

この内容からは、「シエナ會演奏會」には、プロとして活躍している弟子から、趣味で歌っている弟子まで、垣根を超えた弟子たちが一堂に会していた様子が分かる。なお、このコメントは、一回目、3月20日の演奏會に対するものである。

次に、現在までに見つけた、1935年の演奏會以降に書かれたサルコリ関連記事2点を紹介する。いずれも弟子に関する記事で、一つは3月26日付『讀賣新聞』7面に喜波貞子について書かれたものである。「北歐に彗星の如く現れた歌姫」「日本離れて十二年喜波貞子さんリガ社交界の女

王になつても櫻の憧れ歸心ひきり」とのタイトルがつけられた。

「北歐バルチック海沿岸、アカシアの花咲くラトヴィア、その首都リガの社交界に最近『ミス・テイコ・キハ』といふ日本の一歌姫が彗星のごとく現れた、一世界歌行脚の途次にあるソプラノ歌手喜波貞子（三二）さんで同地で第七百五十八回目の歌劇『お蝶夫人』の演奏會を開くやその才能を認められて一躍リガ社交界のヒロインになつてしまつた、貞子さんは南米と奥州をのぞくほか世界中彼女の足跡到らざるなく外國には極く馴染深い歌姫であるが、日本ではまだあまり知られてゐないかつて横濱のオランダ領事館領事として駐在してゐたオランダ人クリンゲン氏を父に日本婦人を母に生まれ、十六歳の春から関屋敏子、原信子さんらの育ての親四谷區仲町10の聲樂家イタリー人アドルフォ・サルコリ氏について聲樂を學び、大正十二年廿一歳のとき母親と姉を伴つて渡歐して以來、歐洲各國を歌行脚してゐる、語學の天才で英、獨、佛、伊、瑞の五ヶ國語を自由に話すといふ才媛である日本を離れて既に十二年餘、最近頻りに母國日本戀ひしく近く歸りたいとの便りを恩師サルコリ氏の許へよせて來てゐる²⁷⁾」（『讀賣新聞』1935.3.26）。

もう一つの記事は7月9日付『讀賣新聞』10面に「緑影日記（19）」に「音楽その日、」と題した関屋敏子の手記である。文中にサルコリの名前が見られるので紹介する。

「獨唱會の行がけに御むかひに行つた時のサルコリー先生の喜びにあふれたアノ涙、ア、十年前の獨唱會の時私とズエツトをされた勢は既になく、すっかり老人になられた御姿に只々むねが一杯になつてしまつた。（…）サルコリー先生はリリックコロラチュラになつたことをとても喜んで居られた、やはりはでな方がいゝ…のだと思つた。ア、これから代表でガリクルチー女史を停車場へおむかひに行かねばならぬ、もう車がきた²⁸⁾」（関屋敏子 1935.7.9）

喜波も関屋もサルコリの弟子の中でも特に活躍した弟子である。日本を離れて12年経つ喜波の記事には、喜波がラトヴィアのリガで非常に活躍していることと、近く日本に帰りたいと恩師サルコリに手紙を送ったこと、一方の関屋の記事には、この10年ですっかり勢いをなくし老いてしまったサルコリの姿に胸が一杯になったことが書かれていた。

おわりに

本稿では、1933年から1935年に日本で書かれたアドルフォ・サルコリ関連の資料を調査・収集し、順に報告を行った。

サルコリの年齢は66歳から68歳で、晩年に当たる。

この期間にサルコリが演奏活動を行ったことを示す資料は見つからなかった。サルコリの写真からは、すっかり年老いた様子が見られ、音楽雑誌や新聞記事には「どうも近頃體の具合が悪くて困ります」というサルコリ本人の言葉や、弟子の「近頃は健康も優れずメツキリ氣が弱つて非常に涙もろくなつた」などの記述の他にも「歩行も困難なほど老衰してゐる」とまで書かれた新聞記事もあった。

徐々に身体が衰えていくサルコリに対し、サルコリの弟子たちの活動は盛んになっていった。弟子たちはサルコリ門下生の会「シエナ会」を結成した。数多くの弟子を育てたサルコリではあるが、これまで弟子が集うことはなかった。弟子たちは会の名前を、サルコリの出身地であるシエナから「シエナ会」と名付け、1933年4月28日に第一回の演奏会を行う。その年の暮れの12月5日には、大阪の弟子たちが中心となり大阪でも演奏会を開催した。大阪の演奏会では、14ページにも及ぶカラーのリーフレットを作るほどの力の入れよう、中にはサルコリのイタリアでの活躍や功績も詳細に紹介されていた。

シエナ会の演奏会は、翌年1934年にも1回、1935年には2回開催された。プログラムによると、出演者は声樂家として活躍している弟子から素人の門下生にも及び、弟子たちが一致団結している様子が伝わる。プログラムの表面に印刷されたサルコリの写真には「Lpadre del Bel Canto in Giappone」（日本におけるベル・カントの父）というイタリア語が添えられていた。

1933年から1935年のサルコリ関連の資料は、数こそ多くは無いものの、その内容から明らかになったのは、自らを「イタリア系」として、恩師サルコリのことを「日本におけるベル・カントの父」とたたえた弟子たちの奮闘ぶりであった。弟子たちは、プロの声樂家として活躍するものから、趣味で歌を習っているものまでが集まり、頻繁に演奏会を開く。東京のみならず関西でも開かれた演奏会のプログラムには「イタリア系」の歌が並び、サルコリの略歴を掲載し、サルコリの功績をたたえるものもあった。

サルコリは、決して自分の功績をひけらかすことがなかったという。1933年から1935年までの資料は、弟子たちが身体の弱った恩師サルコリを歌でなんとか慰めようとする姿が、そして演奏会を通して、日本でのサルコリの功績を「日本におけるベル・カントの父」との言葉で、サルコリに代わり、当時の日本に伝えようとしていた弟子たちの熱い想いが伝わるものであった。

引用文献

- (1) 直江学美 2016「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(1)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第10巻第1号, 23-30頁。
- (2) 直江学美 2017「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(2)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第10巻第2号, 31-40頁。
- (3) 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(3)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第11巻第2号, 53-58頁。
- (4) 直江学美 2018「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(4)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第12巻第1号, 25-32頁。
- (5) 直江学美 2019「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(5)」、『金沢星稜大学人間科学研究』第12巻第2号, 69-74頁。
- (6) 『月刊楽譜』1933「シエナ会大演奏会」。(月刊楽譜発行所) 22巻4号, 116頁。
- (7) 『東京朝日新聞』1933「孤獨に氣も弱るわが樂壇の父」。1933.4.27, 5面。
- (8) プログラム1933「シエナ会大演奏会」。(シエナ会) 1933.4.28。
- (9) 神戸道夫 1933「樂壇日誌」、『月刊楽譜』(月刊楽譜発行所) 22巻5号, 94頁。
- (10) 写真 1933「レインボウグリルでのお茶会」。写真提供, 丸山洋子氏。
- (11) 『月刊楽譜』1933「シエナ会大演奏会」。(月刊楽譜発行所) 22巻6号, 102頁。
- (12) プログラム1933「サルコリ先生略歴謝恩大演奏会」。(シエナ会) 1933.12.5。
- (13) 堀江謙吉 1934「二つの演奏会」、『月刊楽譜』(月刊楽譜発行所) 23巻1号, 119-120頁。
- (14) 伊庭孝1934「十三年ぶりで聴いた原信子の聲」、『讀賣新聞』1934.1.19, 4面。
- (15) 『月刊楽譜』1934「樂壇覚え書」。(月刊楽譜発行所) 23巻3号, 118頁。
- (16) 『月刊楽譜』1934「シエナ會の人々」。(月刊楽譜発行所) 23巻4号, 1頁。
- (17) 『月刊楽譜』1934「第二回シエナ會聲樂大演奏會」。(月刊楽譜発行所) 23巻4号, 102頁。
- (18) プログラム1934「第二回シエナ會聲樂大演奏會」。(シエナ會) 1934.4.20。
- (19) 『月刊楽譜』1934 写真。(月刊楽譜発行所) 23巻5号, 巻頭。
- (20) 写真1935「第三回シエナ會演奏會入場券」。(シエナ會) 1935.3.20。
- (21) 『東京朝日新聞』1935「花に魁けて賑ふ樂壇」。1935.3.2, 7面)
- (22) 松村静光 1935「ア・サルコリー氏とシエナ會の人々を語る」、『国民教育新聞』1935.3.15付, 6面。
- (23) 写真 1935「自宅前で手をあげる晩年のサルコリ」。写真提供, 丸山洋子氏。
- (24) 新聞紙名不明1935「麗人ぞろひのシエナ會演奏會」。1935.3.18。
- (25) 『月刊楽譜』1935「シエナ會演奏會」。(月刊楽譜発行所) 24巻5号, 巻頭。
- (26) 伊庭孝1935「樂壇覚え書」、『月刊楽譜』(月刊楽譜発行所) 24巻5号, 159。
- (27) 『讀賣新聞』1935「日本離れて十二年喜波貞子さんリガ社交界の女王になつても櫻の憧れ歸心ひきり」。1935.3.26, 7面。
- (28) 関屋敏子1935「緑蔭日記(19) 音楽その日々」、『讀賣新聞』1935.7.9, 10面。